

# 「全国家族調査 NFRJ」 プロジェクトの経緯

渡辺秀樹

帝京大学文学部 教授

全国家族調査 (NFRJ: National Family Research of Japan) は、継続的な調査研究プロジェクトであり、今後も長く続くものと期待される。これまでにNFRJ98, 03, 08 (これらは標本抽出の年。調査実施は翌年、つまり99, 04, 09) と3回の調査が実施された。また、特別調査という位置づけで、NFRJ-S01があり、さらにパネル調査としてNFRJ-08Panelが実施されている。

現在、次回すなわち2018年の調査 (NFRJ18) に向けて準備中という段階である。このプロジェクトに、立ち上げから関わってきたものとして、その経緯を簡単に振り返っておきたい。

全国家族調査プロジェクトの特徴のひとつは、日本家族社会学会のもとで運営されていることである。学会の常設委員会のひとつに全国家族調査委員会があり、会則第23条に、「全国家族調査委員会は、全国家族調査や関連する研究活動の実施・統括にあたる」とある。現在、田淵六郎氏が委員長を務めるが、委員長は、全国家族調査担当理事である。

学会が担うプロジェクトであるため、毎年の学会大会の総会では、編集委員会や研究活動委員会などと同様に、報告をし審議事項 (たとえば、委員会予算の増減や、その執行など) で会員の審査を受ける。学会ニュースレターに委員会報告が毎回掲載され、会員に告知される。

また、学会誌『家族社会学研究』では、継続的に関連の記事が掲載される。「NFRJ (全国家族調査) コーナー」というセクションが設けられ、最新号では2本の記事: 永井暁子「全国家族調査 (NFRJ) の役割」と第4回全国家族調査 (NFRJ18) の企画、木戸功「NFRJと質的研究—質的データの収集と分析および公開に向けて」が掲載されている (2016.10, Vol.28, no.2, pp214-223)。

毎年の学会大会では、全国家族調査関連の部会が設けられる。本調査データが用いられる報告を含むという意味では、複数の部会にまたがっていることになる。過去、3回の調査の成果が公刊され

た直後 (1年後) には、書評セッション (あるいは書評ラウンジ) が開かれ、報告は学会誌に書評論文として掲載されている。NFRJ98をまとめた『現代家族の構造と変容—全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』(渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編, 2004, 東京大学出版会) に対しては、『家族社会学研究』のvol.17, no.1 (2005) に、盛山和夫「データを分析することの意味」、ほか掲載されている (pp7-24)。NFRJ03 (とNFRJ98, NFRJ-S01を含む) の『現代日本人の家族—NFRJからみたその姿』(藤見純子・西野理子編, 2009, 有斐閣ブックス) に対しては、vol.22, no.1 (2010) に吉田崇「『現代日本人の家族』と全国家族調査の意義」、米村千代「NFRJからみた現代家族の姿—パブリシティと専門性の接合」などが載っている (pp89-101)。

第3回のNFRJ08まで蓄積されたデータを踏まえた成果は、『日本の家族 1999-2009—全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学』(稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編, 2016, 東京大学出版会) にまとめられ、その書評セッションは、2017年の学会大会 (京都大学にて、9月9日-10日開催) に予定されている。

こうして、現在までの全国家族調査プロジェクトと学会との関係をみると、活動内容を常にオープンにしてきたという特徴を持つ。公開性の原則は、魅力あるデータの構築と分析を促し、若い研究者の関心をひいて、本プロジェクトの持続的な発展につながることを期待されている (写真は1995年に創刊された『NFRレター』である。プロジェクト初期の学会会員への広報・交流の媒体として役割を果たした)。





Column  
社会調査  
の  
あれこれ

## 私の社会調査事始

片瀬一男

東北学院大学教養学部 教授

高校時代、民俗学のサークルに入っていた。入部当時、サークルは危機的状況にあった。部員は3年生が5名、新入部員は私1人だけだったからである。3年生からは、3年間は講集団とくに庚申講の研究を続けるよう言われた。庚申信仰は道教に起源をもつ。それによれば、人間の体内には三戸という3匹の虫がおり、庚申の夜に眠るとそれが天に上り天帝に自分の悪事を告げるから、その晩は集まって徹夜をして過ごすことになっていた。

夏休みには近隣の村の公民館に泊まり、庚申講について聴き取り調査をした。私は3年生の後について回り、挨拶の仕方から調査依頼、聴き取りの仕方まで学ぶよう言われた。3年生も私も、聴き取りの技法継承に必死だった。最後の晩、自分1人で聴き取りをするよう言われた。何を聴き取ったかは今は忘れたが、立派な応接間に通されたこと、終わった後、先輩からは何も言われなかったことだけを覚えている。

調査が終わるとその結果を文化祭で発表、ここまでは3年生がやってくれた。その後、報告書を書かねばならないが、その頃、3年生は受験勉強に入る。1人で何とか草稿を仕上げ、顧問の教師に見せに行った。顧問は旧東京教育大学で民俗学を学んだ教師で、当時、被差別部落の研究に手を伸ばしていたこともあり、それほど熱心に指導をしてくれなかったが、それでも的確な寸評を書いてくれた。

翌年、新入部員も入り、言われた通り3年間、庚申講の調査をした。そこから得た結論は、今から言い直せばこうなる。庚申講は本来、信仰共同体だが、庚申の夜に皆で神人共食をするという名目で潜在的には親睦と連帯形成の機能を果たしており、これに代わる機能集団が出現することで衰退に向かうだろう——これは機能主義的な説明である。それは、残された伝承から文字文化をもたぬ常民の歴史を復元するという民俗学の方法——柳田國男が方言圏論などで示した重出立証法とはベクトルを異にする。この草稿を読んだ顧問の教師は多く

を語らなかったが、ただ「大学院に行くなら語学を勉強しておけ」とだけ言われた。

大学では文化人類学のサークルに入って、B. K. マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』を読んだ。そこでは、クラと呼ばれる財宝がトロブリアンダ諸島で交換されるが、それは経済的機能よりも島々の連帯を形成する潜在的機能を果たしていることが書かれていた。それは神人共食をして夜明けかきをする庚申待ちが潜在的に果たしている機能と同じだと思った。

こうして機能主義は理解できたが、大学2年の時、田原音和先生がフランス留学から帰られ、講演会でC. レヴィ＝ストロースの構造人類学の紹介をされた。ところが、これが全く理解できず、衝撃を受けた。私が構造主義のことを理解できたのは、教育学部の大学院生らのJ. ピアジェの読書会に入れてもらった時である。ピアジェは認知構造が同化と調整を繰り返して発達していく過程を発生的構造主義の枠組みで理論化していた。この構造主義の理解は、L. コールバーグの道徳的発達の理論だけでなく、構造と実践をダイナミックに関連づけるP. ブルデューの理論を理解するうえでも役立った。また、この頃には、上野千鶴子『構造主義の冒険』、浅田彰『構造と力——記号論を超えて』も出版され、日本にも構造主義ブームが訪れた。ただし、私は当時、西田春彦・海野道郎両先生の下で助手となり、1985年のSSM調査に関わり、計量社会学の道を歩むことになった。